Research Monograph Series

# 複式簿記からデリバティブ空間へ

## ——生成学における記号化・信用・時間・現実接地の存在論——

# From Double-Entry Bookkeeping to Derivative Space:

## An Ontology of Symbolization, Credit, Temporality, and Reality Grounding in Generative Studies

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

# Publication Information

## Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

## License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

## Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

From Double-Entry Bookkeeping to Derivative Space:
An Ontology of Symbolization, Credit, Temporality, and Reality-Grounding in Generative Studies

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

# Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

# 要旨

本論文の目的は、複式簿記とデリバティブ空間との関係を、単純な金融史上の因果関係としてではなく、記号化、関係化、時間化、自己外部化、評価、再帰性、現実接地という複数の存在論的次元から再考することにある。

複式簿記は金融デリバティブを直接生み出した技術ではなく、それ自体が金融デリバティブであるわけでもない。しかし複式簿記は、異質な経済的出来事を統一された勘定体系へ写し取り、資産、負債、純資産、収益、費用などの相互関係として記述することを可能にした。また、将来に決済される債権や債務を現在の財政状態の構成要素として認識することによって、異なる時間に属する関係を現在の記号体系へ組み込む機能を持つ。

本論文では、この複式簿記の構造を、美学者母による生成学、生成の位相存在論、インターフェイス存在論、自己外部化論、人間以前性と自己以前性、評価・証明・価値の力学、言語デリバティブ論、即、力、現実接地の諸概念と接続する。

その際、三つの分析水準を区別する。第一は、複式簿記と近代金融制度との歴史的連関である。第二は、会計、信用、金融市場、金融デリバティブ、生成AIなどに見られる構造的類似性である。第三は、現実から生成された記号が次なる基礎対象となり、そこからさらに記号が派生し、その派生物が再び現実を変容させるという存在論的再帰性である。

本論文は、この第三の構造を「デリバティブ空間」と定義する。デリバティブ空間とは、単に金融派生商品が取引される市場を意味するのではない。ある現実から生成された記号が、新たな評価、予測、契約、物語、判断の基礎となり、その派生物がさらに現実へ作用する再帰的空間である。

この立場から見ると、複式簿記はデリバティブ空間そのものではなく、現実を関係的な記号体系へ外部化し、異なる時間を現在へ接続し、その記号を意思決定可能な形式へ変換するという意味で、デリバティブ空間を可能にする基礎的インターフェイスの一つとして位置づけられる。

最終的に本論文は、現代社会の問題を記号化そのものに求めるのではなく、記号体系の内部整合性と現実接地との乖離に求める。そして、記号と現実との差異を消去せずに両者を生成的に接続する構造を「即」と捉え、その接続構造が現実の位相変換として現象する運動を「力」として論じる。

## キーワード

生成学、生成の位相存在論、複式簿記、デリバティブ空間、言語デリバティブ論、信用、時間、インターフェイス存在論、現実接地、即、力

# 目次

## Contents


0. 方法論的序論 ..... 1

1. 複式簿記とは何を記録するのか ..... 1

2. 生成の位相存在論との接続 ..... 2

3. 複式簿記と自己外部化 ..... 3

4. 複式簿記における時間 ..... 3

5. 信用の存在論 ..... 4

6. 会計、信用、証券、市場評価 ..... 5

7. デリバティブ空間の定義 ..... 5

8. 基礎対象の移動 ..... 6

9. 形式的整合性と現実的妥当性 ..... 6

10. 言語デリバティブ論との統合 ..... 7

11. 逆問題としてのデリバティブ空間 ..... 8

12. 空売りと時間の反転 ..... 8

13. 評価・証明・価値の力学 ..... 9

14. 記号的レバレッジ ..... 9

15. 現実接地とは何か ..... 10

16. 即とインターフェイス ..... 10

17. 力の生成 ..... 10

18. 資本の時間的生成 ..... 11

19. 近代から生成AIへの構造的連続性 ..... 11

20. 生成学における五つの命題 ..... 12

結論 ..... 13

参考文献 ..... 15

方法論的声明 ..... 16

# 0. 方法論的序論

複式簿記とデリバティブ空間との関係を論じる際には、最初に重要な限定が必要である。

本論文は、複式簿記が金融デリバティブを直接的に生み出したと主張するものではない。

現代的な金融デリバティブの成立には、信用制度、株式会社、証券市場、契約法、確率論、金融数学、通信技術、コンピュータ、規制制度など、多数の歴史的条件が関与している。

したがって、複式簿記から金融デリバティブが一直線に発展したと説明することは適切ではない。

本論文が問題とするのは、より基礎的な構造である。

すなわち、複式簿記によって、現実の経済的出来事が統一された記号体系へ外部化され、その記号体系の内部で関係づけられ、異なる時間に属する権利や義務が現在の状態として認識され、その記号的状態が再び人間の意思決定を通じて現実へ作用するようになったという構造である。

このため本論文では、三つの水準を区別する。

第一は歴史的因果関係である。

第二は構造的類似性である。

第三は存在論的連続性である。

生成学が主として問題とするのは第三の水準である。

# 1. 複式簿記とは何を記録するのか

複式簿記の特徴は、一つの経済的出来事を単独の数量として記録するのではなく、複数の勘定項目の関係変化として記述することにある。

たとえば現金が増加したという事実だけでは、その経済的意味は確定しない。

その現金が商品の販売によって得られたのか、借入によって得られたのか、出資によって得られたのか、あるいは他の資産を売却して得られたのかによって、その後に生じる権利、義務、期待、責任は異なる。

したがって、数量として同一の金額であっても、その生成関係が異なれば、その会計的意味も異なる。

ここで重要なのは、量的な同一性と関係的位置の差異を区別することである。

百万円は数量としては同じ百万円である。

しかし売上によって得られた百万円と、借入によって得られた百万円は、企業全体の関係構造の中では異なる位置を占める。

この点において、複式簿記は単なる数量記録ではない。

それは、経済的出来事を関係構造として形式化する技術である。

## 2. 生成の位相存在論との接続

生成の位相存在論において、存在はあらかじめ完成した孤立的実体ではない。

存在は、自己、他者、環境との関係を通じて生成される。

この観点から複式簿記を見るならば、会計上の項目もまた、その物自体だけによって意味を持つのではなく、どのような関係から生成されたかによって意味を持つ。

同じ現金でも、その背景にある関係が異なれば、その存在論的位置は異なる。

したがって、複式簿記は存在を物としてではなく、関係の中に位置づける一つの制度的形式であると理解することができる。

ここで生成の位相存在論との接点が生じる。

生成の位相存在論が存在を関係生成として捉えるのに対し、複式簿記は経済的出来事を関係変化として記述する。

両者は同一ではない。

しかし、固定的実体よりも関係配置を重視するという点において、構造的な親和性を持つ。

## 3. 複式簿記と自己外部化

複式簿記は、主体の活動を主体の外部へ記述可能な形で取り出す。

企業活動は、財務諸表という形式によって企業の外部に表現される。

しかし財務諸表は企業そのものではない。

企業には人間、技術、設備、文化、信用、歴史、地域との関係など、会計上の数値だけでは把握できない多くの側面が存在する。

したがって、企業そのものと会計的表象は区別されなければならない。

ここに自己外部化の構造が成立する。

主体は自らの活動を記号として外部化する。

しかし近代社会において重要なのは、その外部化された記号が単なる記録に留まらないことである。

銀行は財務諸表を見て融資を決定する。

投資家は決算を見て資本を配分する。

市場は報告された業績を見て価格を形成する。

経営者は市場評価を見て企業行動を変える。

この結果、主体から生成された記号が、再び主体そのものを変化させる。

自己外部化は、一方向的な外部化ではなく、再帰的な循環となる。

この構造は、美学者母の自己外部化論における重要な問題と整合する。

## 4. 複式簿記における時間

複式簿記とデリバティブ空間との関係を考える際、時間の問題は特に慎重に扱う必要がある。

債権や債務を会計上認識することと、将来のキャッシュフローを現在価値に割り引くことは同じではない。

この二つを混同してはならない。

しかし、将来に決済される権利や義務が、現在の財政状態の一部を構成するという点において、複式簿記には明確な時間的構造が存在する。

借入を行えば、将来に返済する義務が現在の負債として認識される。

売掛金が発生すれば、将来に受け取る権利が現在の資産として認識される。

つまり、将来に完了する関係が、現在の制度的状態を構成する。

この意味に限定すれば、複式簿記には「未来の現在への畳み込み」と呼べる構造が存在する。

未来そのものが現在になるのではない。

未来に関わる権利や義務が、現在の行為可能性を規定する関係として現れるのである。

## 5. 信用の存在論

この時間構造をさらに明確に示すものが信用である。

信用とは、現在存在する物の単純な交換ではない。

将来の返済、将来の収益、将来の履行に対する期待が、現在の行為可能性へ変換される制度である。

借り手が将来返済することへの期待があるからこそ、現在の時点で資金が供給される。

したがって信用とは、まだ実現していない未来が、制度的に媒介されることによって現在の行為へ作用する構造である。

ここで「無いものが在る」という表現を慎重に理解する必要がある。

未来の返済は、現在にはまだ実現していない。

しかし、その未来への期待は現在の融資、投資、設備購入、雇用などを実際に生み出す。

したがって、現在にはまだ実現していないものが、現在の現実に実効的な力を持つ。

この構造は、言語デリバティブ論におけるハルシネーションの問題と接続可能である。

ただし、信用とAIのハルシネーションを同一視するのではない。

両者に共通するのは、現前していないものが、記号的媒介を通じて現在の行為に作用するという構造である。

## 6. 会計、信用、証券、市場評価

複式簿記、信用、証券、市場価格、金融デリバティブは、それぞれ異なる制度である。

したがって、これらを単一の発展段階として同一視することはできない。

しかし、それらは相互に接続されている。

現実の経済活動は会計によって記述される。

会計情報は信用判断に利用される。

信用や将来収益への期待は企業や証券の評価に影響する。

証券価格は市場で形成される。

そして市場価格や金利、為替、指数などが金融デリバティブの基礎となる。

同時に、この関係は逆方向にも作用する。

デリバティブ価格が市場期待に影響し、市場価格が企業行動に影響し、企業行動が現実の投資や雇用を変える。

したがって重要なのは、一方向の発展ではなく、相互作用する再帰構造である。

## 7. デリバティブ空間の定義

本論文では「デリバティブ空間」を、金融派生商品だけに限定しない。

デリバティブ空間とは、ある現実について生成された記号的表象が、次の評価、予測、契約、判断、物語の基礎となり、そこからさらに新しい記号が派生し、その派生物が最終的に現実へ戻って作用する空間である。

現実が記号になる。

その記号が新しい記号の基礎になる。

さらにその記号が次の判断の基礎になる。

そして、その判断が人間の行為を変え、現実を変える。

この循環が成立したとき、派生物は単なる二次的な表象ではなくなる。

派生物そのものが、次なる現実の生成条件となる。

この状態を、本論文ではデリバティブ空間と呼ぶ。

## 8. 基礎対象の移動

デリバティブ空間を理解する上で最も重要な概念の一つが、「基礎対象の移動」である。

通常、派生物とは何か別のものから派生する。

しかし派生が再帰化すると、ある段階では派生物であったものが、次の段階では基礎対象になる。

企業活動から利益という会計値が生まれる。

利益から一株当たり利益などの指標が作られる。

それらの指標や将来予測を参照して株価が形成される。

その株価がオプションなどの金融商品の基礎となる。

このとき、ある段階で派生したものが、次の段階の「現実」として扱われる。

これが基礎対象の移動である。

この概念は言語デリバティブ論にとっても重要である。

ある文章が生成される。

その文章が引用される。

引用された文章が別の議論の根拠になる。

さらにその文章が検索結果やAIの参照情報として使われる。

こうして、派生した言語が次なる言語生成の基礎となる。

## 9. 形式的整合性と現実的妥当性

複式簿記では、借方と貸方が形式的に対応する。

しかし、この形式的整合性は、企業や経済の現実が健全であることを意味しない。

倒産する企業であっても、帳簿は正確に作ることができる。

損失も、債務超過も、破産も、会計的に整合的に記録できる。

したがって、会計体系が内部的に整合していることと、その企業が現実に存続可能であることは別問題である。

この区別は生成AIについても重要である。

生成された文章が文法的に正しく、論理的に見え、説得的であっても、その内容が現実に対応しているとは限らない。

したがって、

「内部整合性」と「現実接地」は区別されなければならない。

会計と生成AIは同じものではない。

しかし、記号体系内部の整合性が外部の現実との対応を自動的には保証しないという点では、構造的な共通性がある。

## 10. 言語デリバティブ論との統合

言語デリバティブ論は、金融用語を単純に言語へ比喩的に移したものではない。

その核心は、記号から記号が派生し、その派生物がさらに新しい基礎対象となる構造にある。

人間は現実を言語化する。

その言語をもとに別の言語が生成される。

その生成された言語がさらに別の文章や判断の基礎となる。

生成AIでは、この派生が大規模かつ高速に自動化される。

重要なのは、AIが必ずしも現実そのものから直接文章を生成しているわけではないことである。

多くの場合、AIはすでに人間によって記号化された言語世界を基礎として、新しい言語を生成する。

したがって、生成AIは「現実から言語」だけではなく、「言語からさらに言語」への派生を大規模化する。

そして、その生成された文章が人間の判断や制度や政策や行為へ影響するとき、派生した言語が再び現実を形成する。

ここに言語デリバティブ空間が成立する。

## 11. 逆問題としてのデリバティブ空間

通常の表象関係では、現実が先に存在し、その現実を表象が後から記述すると考えられる。

しかしデリバティブ空間では、表象が現実を先取りする。

企業が将来成長すると市場が予測する。

その予測によって株価が上昇する。

株価上昇によって資金調達が容易になる。

企業が設備投資や研究開発を拡大する。

その結果、当初予測されていた成長を実現する条件の一部が現実に形成される。

ここでは、未来についての予測が現在の行為を変え、その現在の行為が未来の現実を生成する。

つまり、表象が現実の結果であるだけでなく、現実の原因の一部となる。

この構造は、美学者母の逆問題芸術と深く接続する。

## 12. 空売りと時間の反転

空売りについては、概念上の区別が必要である。

空売りそのものは、必ずしも金融デリバティブではない。

現物株式を借りて売却し、後で買い戻して返却する取引と、オプションや先物などを用いて価格下落にポジションを取ることは区別されなければならない。

しかし空売りは、デリバティブ空間の時間構造を非常に明確に示す。

通常の売買では、先に取得し、その後で売却する。

空売りでは、先に借りて売却し、後から買い戻す。

つまり現在の取引が、未来の買戻しという義務を生成する。

重要なのは、「保有していないものを売却する」という表面的な逆説性ではない。

現在の契約行為が、未来の特定の行為を要求する関係を生成することである。

この意味で、空売りは時間関係の組み替えとして理解できる。

## 13. 評価・証明・価値の力学

会計はもともと経済的出来事を記述するための技術である。

しかし近代社会では、その記述が評価へ転換される。

利益率、自己資本利益率、一株当たり利益、信用格付け、企業価値など、記録された情報からさまざまな評価指標が生成される。

その評価が融資、投資、経営、報酬、政策などと結びつくと、評価は単なる観察ではなくなる。

評価が人間の行為を方向づける。

企業は指標を改善するために行動を変える。

経営者は市場評価を意識する。

国家も金融市場からの評価を考慮する。

このとき、記号は現実を記述するだけでなく、現実を動かす力になる。

ここで『評価・証明・価値の力学』との接続が成立する。

## 14. 記号的レバレッジ

デリバティブ空間では、小さな記号変化が、大きな現実変化へ増幅されることがある。

信用格付けの変更が調達金利に影響する。

株価の変化が資金調達能力に影響する。

ある評価指標の変化が経営方針に影響する。

SNS上の物語が市場参加者の行動を変える。

生成AIが作った言説が社会的判断を変えることもありうる。

このように、派生した記号が、その記号の大きさを超えた現実的効果を生む構造を、本論文では「記号的レバレッジ」と呼ぶ。

これは金融工学におけるレバレッジと同一ではない。

しかし、限られた記号的変化が増幅され、より大きな現実効果を生むという構造において類似性がある。

## 15. 現実接地とは何か

以上から、問題は記号化そのものではないことがわかる。

人間は言語、貨幣、会計、法律、制度なしに複雑な社会を形成することはできない。

したがって、記号化される以前の純粋な現実へ戻ることが解決ではない。

重要なのは、記号体系と個別具体的な現実との接続が維持されているかどうかである。

本論文ではこれを「現実接地」と呼ぶ。

現実接地とは、記号と現実を完全に一致させることではない。

記号は現実そのものではない。

その差異を維持しながら、現実によって記号が修正され、記号によって現実が再構成される開かれた関係を保持することが現実接地である。

## 16. 即とインターフェイス

この関係は「即」という概念によってさらに明確になる。

即とは、二つのものが完全に同一になることではない。

異なるものが、異なったまま接続されることである。

記号と現実が同一になるのではない。

記号と現実との差異が保持されたまま、両者が生成的に接続される。

その接続面がインターフェイスである。

したがって、インターフェイスは単なる中間物ではない。

異なる位相を保持しながら、その差異の間に生成的な関係を成立させる面である。

複式簿記もまた、具体的な経済活動と抽象的な記号体系を接続する一つのインターフェイスとして理解できる。

## 17. 力の生成

生成学における力は、単なる運動量や物理的エネルギーではない。

異なるものが接続され、その接続によって現実に新しい差異が生まれるとき、力が生成される。

差異がなければ生成は起こらない。

しかし差異だけがあり、接続がなければ相互作用は起こらない。

したがって、差異と接続の両方が必要である。

記号と現実が異なるからこそ、両者の接続から変化が生じる。

この接続構造が現実の位相変換として現象するとき、

その生成的運動を、生成学における「力」と呼ぶ。

逆に、記号が記号だけを参照し、現実との接続を失う場合、大量の活動や情報処理が行われていても、個別具体的な現実を変える力は失われる可能性がある。

## 18. 資本の時間的生成

この議論は『資本の生成論』へ接続する。

資本を単なる貨幣の蓄積として見るだけでは、その時間構造を捉えることができない。

資本は、未来の可能性を現在の行為可能性へ変換する。

投資は将来の利益を期待して現在の資源を投入する。

信用は将来の返済能力を現在の購買力へ変換する。

株式価格は将来収益への期待を現在の価格へ反映する。

金融デリバティブは将来の価格変動やリスクを現在の契約へ組み込む。

したがって資本は、未来と現在を接続する時間的インターフェイスとして捉えることができる。

複式簿記がこれらすべてを直接生み出したわけではない。

しかし複式簿記は、異なる時間に属する権利、義務、成果、期待を現在の記号体系の内部で管理可能にする重要な制度的基盤となった。

## 19. 近代から生成AIへの構造的連続性

会計、金融、生成AIを、一つの単線的歴史として扱うことはできない。

しかし、それらを横断する共通の生成構造を見出すことは可能である。

まず現実の活動が外部化される。

次に外部化されたものが記号化される。

その記号からさらに別の記号が派生する。

派生した記号が評価に利用される。

評価が意思決定へ作用する。

意思決定が再び現実を変える。

この循環が再帰的に繰り返される。

複式簿記は経済活動の外部化と関係化を制度化した。

金融市場は評価と価格形成を大規模化した。

デリバティブは派生そのものを契約化した。

生成AIは言語から言語への派生を大規模に自動化した。

これらを同一視するのではなく、異なる領域で実現された類似した生成構造として捉えることが、生成学の課題となる。

## 20. 生成学における五つの命題

以上の議論は、五つの命題として整理できる。

**第一命題　関係化**

複式簿記は、経済的出来事を単独の数量ではなく、勘定体系全体の関係変化として形式化する。

**第二命題　時間化**

複式簿記は、将来に決済される権利や義務を現在の財政状態の構成要素として認識することによって、異なる時間を一つの記号体系へ接続する。

**第三命題　自己外部化**

会計は、主体の活動を外部的な記号として記述可能にし、その記号を主体から相対的に独立させる。

**第四命題　再帰性**

外部化された記号は、評価、信用、価格、投資、意思決定を媒介して、再びその記号を生成した現実へ作用する。

**第五命題　デリバティブ空間**

ある派生記号が次なる基礎対象となり、そこからさらに記号が派生し、その派生物が再び現実へ作用するとき、デリバティブ空間が成立する。

# 結論

本論文は、複式簿記とデリバティブ空間との関係を、直接的な金融史上の因果関係ではなく、関係化、時間化、記号化、自己外部化、評価、再帰性、現実接地という生成学的構造から再考した。

複式簿記は金融デリバティブそのものではない。

また、複式簿記から現代金融が必然的に生まれたわけでもない。

しかし複式簿記は、現実の経済的出来事を統一された記号体系へ外部化し、それらを相互関係として記述し、異なる時間に属する権利や義務を現在の状態へ組み込み、その記号を意思決定に利用可能にする重要な制度的転換を成立させた。

さらに、会計的記号が信用判断や市場評価へ利用され、その評価が企業行動や社会的意思決定へ戻ることによって、記号と現実の関係は再帰的になる。

この再帰性が深化すると、ある現実から生まれた派生物が、次の段階では新しい基礎対象となる。

利益が指標の基礎となり、指標が市場評価の基礎となり、市場価格が金融契約の基礎となる。

同じ構造は、言語においても生じる。

現実から言語が生成され、言語から別の言語が生成され、その生成物がさらに判断や制度や行為の基礎となる。

ここに、金融デリバティブと言語デリバティブを単なる比喩以上のものとして比較する理論的可能性が生じる。

生成学が問題とするのは、記号か現実かという二者択一ではない。

重要なのは、記号がどこから派生し、どの段階で新しい基礎対象となり、どのような評価やレバレッジを通じて現実へ作用し、そこで現実接地が維持されているかということである。

記号と現実の差異を保持したまま両者が生成的に接続される構造が「即」である。その接続構造が現実の位相変換として現象する運動が「力」である。

したがって、デリバティブ空間の本質的問題は派生そのものではない。

問題は、派生と現実との関係である。

この観点から見るならば、複式簿記は単なる会計技術ではない。

それは、現実を関係的記号として外部化し、異なる時間を現在の制度的状態へ接続し、その記号が再び現実生成へ参与することを可能にした、近代的デリバティブ空間の基礎的インターフェイスの一つとして位置づけることができる。

# 参考文献

Bryan, Dick, and Michael Rafferty. Capitalism with Derivatives: A Political Economy of Financial Derivatives, Capital and Class. Palgrave Macmillan, 2006.

Carruthers, Bruce G., and Wendy Nelson Espeland. “Accounting for Rationality: Double-Entry Bookkeeping and the Rhetoric of Economic Rationality.” American Journal of Sociology 97, no. 1, 1991, pp. 31–69.

Ijiri, Yuji. Theory of Accounting Measurement. American Accounting Association, 1975.

Littleton, A. C. Accounting Evolution to 1900. American Institute Publishing Company, 1933.

LiPuma, Edward, and Benjamin Lee. Financial Derivatives and the Globalization of Risk. Duke University Press, 2004.

MacKenzie, Donald. An Engine, Not a Camera: How Financial Models Shape Markets. MIT Press, 2006.

Pacioli, Luca. Summa de Arithmetica, Geometria, Proportioni et Proportionalita. Venice, 1494.

Poovey, Mary. A History of the Modern Fact: Problems of Knowledge in the Sciences of Wealth and Society. University of Chicago Press, 1998.

Yamey, Basil S. “Scientific Bookkeeping and the Rise of Capitalism.” Economic History Review 1, no. 2–3, 1949, pp. 99–113.

# 方法論的声明

**——研究覚書の公開に関する方法論的声明——**

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。